

「太郎と沖繩」

文と絵・下地 恒 Hasashi Shinuji

日 本を代表する偉大な芸術家、岡本太郎。

今年、生誕100年だぞうだ。なるほど、やたら太郎というコトバを耳にする。ここ、沖繩でも県立美術館にて「岡本太郎と沖繩」の企画展が開催された（6月26日まで）。2002年だったか、那覇のパレット市

民劇場で岡本太郎のパートナーであった岡本敏子さんの講演があり、「生」太郎を知らない私も、敏子さんの言葉の中の岡本太郎に引きずり込まれた。

「芸術は爆発だ」初めてこのコトバを聞いたのはごく昔、小学校低学年くらいだったと思う。テレビのC

Mで「ガラスの底に顔があってもいいじゃないか」といつて聴視者に差し出して

いる太郎。すごいインパクトでもよく覚えている。EXPO70・大阪万博に

登場した太陽の塔。かの建築界の大御所、丹下健三が設計した銀色のトラスで構築された大屋根が真骨頂の

テーマ館。設計が終了していたにもかかわらず、中央に大きな穴をあけ、シンボ

ルの大屋根から高さ70メートルもある太陽の塔の上半分を突き出すことを提案し、

了承させた。「オレは進歩と調和なんて大嫌いだ」

いやいやしかし、さすが岡本太郎、丹下健三の大屋根を突き破るだけある。偉大な芸術家である。この予想外の突き出しによって、

博覧会の「シンボル性」は、大屋根ではなく太陽の塔への記憶となった。

その、岡本太郎がなぜに沖繩なのか。

太郎の一つの大きな発見は、縄文土器との出会い。更に太郎は現実の日本の中に、その手応えを求めて日本再発見の旅に出る。そして最後にぶつかったのが

「沖繩」だったのだ。「それは私にとって、一つの恋のようなものだった」と言うほど、衝撃的な出会いだ

ったと言う。「現代の日本をみつめなおすカガミだ」とも。

沖繩が米軍の占領下の時代に太郎はやって来た。一度目は1959年、沖繩本島、石垣島、竹富島などを巡って取材。沖繩に深く根

ざした民俗文化を通して日本文化に鋭くメスを入れた「沖繩文化論」忘れられた日本」を出版した。

二度目は1966年。再び沖繩を訪れたその時、12年ごとに行われる久高島の古代より伝わる神事「イザイホー」を、岡本太郎の眼

でとらえている。50年以上前に、捉えた素肌のままの沖繩が写し出されている。驚くべきことに写真のほとんどがトリミングされてお

らず、1シーンごとに1カットのみの勝負。あの眼力のフレームに収めたそのま

まが決定的なのだ。岡本太郎の眼玉はすごい。常に裂けるほどの眼をみひ

らいた顔をしているが、元来は決して大きな眼の持ち主ではないらしい。彼の顔

写真は、そこに感じられる肉体の緊張を通じて、異様なほど強い印象を与える。内部から噴出する悲痛なま

での「生」の自覚が、苦しみや悩みを感じさせるのだろう。

「絶望」を新しい色で

彩る。それが芸術だ。という岡本太郎の世界を、ぜひ堪能してもらいたい。

企画展開催中に行われたシンポジウムで、久高島での風葬墓の写真の問題も話題に出たが、やはりもうひとつの「太郎と沖繩」の關係は避けて通れない重いテーマがあるのも事実。岡本太郎という、言ってみれば人騒がせの派手なエピソードの多い芸術家、見ている私たちがどう見るかが問われる。

なによりも沖繩の純粹さ、潔癖さ、優しさ、強さ、岡本太郎の目が捉えた、彼にしか見ることのできなかつた沖繩。あの鋭い眼光に写し出された沖繩。

「沖繩が日本復帰するのでなく、日本が沖繩に復帰すべきだ」と言い放った岡本太郎。

今年太郎の魅力に御用心。

今年太郎の魅力に御用心。

今年太郎の魅力に御用心。

今年太郎の魅力に御用心。

今年太郎の魅力に御用心。

今年太郎の魅力に御用心。

今年太郎の魅力に御用心。

今年太郎の魅力に御用心。

今年太郎の魅力に御用心。

今年太郎の魅力に御用心。

● Atelier DUG Architect 建築設計事務所
主宰：下地 恒(しもじ ひさし)

略歴

1966年生まれ 宮古島市平良出身
1989年 大学卒業後、福岡の設計事務所在籍
1993年 匠設計入社 洲鎌朝夫氏に師事
2004年 Atelier DUG Architect(アトリエ・ダグ・アーキテクト)建築設計事務所を設立



日本を代表する偉大な芸術家、岡本太郎。今年、生誕100年だぞうだ。なるほど、やたら太郎というコトバを耳にする。ここ、沖繩でも県立美術館にて「岡本太郎と沖繩」の企画展が開催された（6月26日まで）。2002年だったか、那覇のパレット市民劇場で岡本太郎のパートナーであった岡本敏子さんの講演があり、「生」太郎を知らない私も、敏子さんの言葉の中の岡本太郎に引きずり込まれた。「芸術は爆発だ」初めてこのコトバを聞いたのはごく昔、小学校低学年くらいだったと思う。テレビのCMで「ガラスの底に顔があってもいいじゃないか」といつて聴視者に差し出して

いる太郎。すごいインパクトでもよく覚えている。EXPO70・大阪万博に登場した太陽の塔。かの建築界の大御所、丹下健三が設計した銀色のトラスで構築された大屋根が真骨頂のテーマ館。設計が終了していたにもかかわらず、中央に大きな穴をあけ、シンボルの大屋根から高さ70メートルもある太陽の塔の上半分を突き出すことを提案し、了承させた。「オレは進歩と調和なんて大嫌いだ」

いやいやしかし、さすが岡本太郎、丹下健三の大屋根を突き破るだけある。偉大な芸術家である。この予想外の突き出しによって、博覧会の「シンボル性」は、大屋根ではなく太陽の塔への記憶となった。

その、岡本太郎がなぜに沖繩なのか。

太郎の一つの大きな発見は、縄文土器との出会い。更に太郎は現実の日本の中に、その手応えを求めて日本再発見の旅に出る。そして最後にぶつかったのが「沖繩」だったのだ。「それは私にとって、一つの恋のようなものだった」と言うほど、衝撃的な出会いだったと言う。「現代の日本をみつめなおすカガミだ」とも。

沖繩が米軍の占領下の時代に太郎はやって来た。一度目は1959年、沖繩本島、石垣島、竹富島などを巡って取材。沖繩に深く根ざした民俗文化を通して日本文化に鋭くメスを入れた「沖繩文化論」忘れられた日本」を出版した。

二度目は1966年。再び沖繩を訪れたその時、12年ごとに行われる久高島の古代より伝わる神事「イザイホー」を、岡本太郎の眼でとらえている。50年以上前に、捉えた素肌のままの沖繩が写し出されている。驚くべきことに写真のほとんどがトリミングされておらず、1シーンごとに1カットのみの勝負。あの眼力のフレームに収めたそのままが決定的なのだ。岡本太郎の眼玉はすごい。常に裂けるほどの眼をみひらいた顔をしているが、元来は決して大きな眼の持ち主ではないらしい。彼の顔写真は、そこに感じられる肉体の緊張を通じて、異様なほど強い印象を与える。内部から噴出する悲痛なまでの「生」の自覚が、苦しみや悩みを感じさせるのだろう。

「絶望」を新しい色で彩る。それが芸術だ。という岡本太郎の世界を、ぜひ堪能してもらいたい。

企画展開催中に行われたシンポジウムで、久高島での風葬墓の写真の問題も話題に出たが、やはりもうひとつの「太郎と沖繩」の關係は避けて通れない重いテーマがあるのも事実。岡本太郎という、言ってみれば人騒がせの派手なエピソードの多い芸術家、見ている私たちがどう見るかが問われる。

なによりも沖繩の純粹さ、潔癖さ、優しさ、強さ、岡本太郎の目が捉えた、彼にしか見ることのできなかつた沖繩。あの鋭い眼光に写し出された沖繩。

「沖繩が日本復帰するのでなく、日本が沖繩に復帰すべきだ」と言い放った岡本太郎。

今年太郎の魅力に御用心。